

知識の絵本と図鑑と造形表現の総合的な指導の考察

－ 国語授業「めだか」「図鑑づくり」と認定こども園・千葉敬愛短期大学附属幼稚園の
保育実践「カタツムリの描画」より －

The Integrated Guidance of “A Picture Book of Knowledge”,
“An Illustrated Reference Book”, and “The Children’s Art”
－ A Study of the Class in Japanese Language of “*A Killifish*” and
“The Making of an Illustrated Reference Book”, and the Child Care Practice of
“A Drawing of a Snail” by Chiba Keiai Junior College Affiliated
Kindergarten (The Center for Early Childhood Education and Care) －

久保木 健夫

Takeo KUBOKI

キーワード：絵本 図鑑 幼児教育・保育・初等教育 領域表現（造形）・図画工作
領域言葉・国語 領域環境・生活・理科

1. はじめに

本論は、普段の園における日常生活の中で、絵本と図鑑の活用から造形表現に展開する保育のあり方を、教育・保育実践の事例に基づきながら考察する。教育・保育実践に有益で、汎用性の高い造形表現の一層の充実と蓄積を図ることを目的としている。

子どもは、園や家庭を含めた日常生活を過ごす中で、多様な体験を総合的に積み重ねながら成長していく。こうした子どもの育ちに焦点を当て、教育・保育における造形表現のより良いあり方を、総合的な指導という視点から考察していきたいと考えている。

本研究は、これまでに、総合的・教科横断的な視点から、絵本を手がかりにして造形・図画工作の基礎・基本と各領域・各教科等との接続部分に関する考察を行ってきた¹⁾。今回、本論では、絵本の活用に加えて、さらに図鑑を考察の手がかりとして付け加えて考察することとし

た。図鑑を加えることによって、教育・保育における造形表現のあり方を、より一層広がりを持つ形で、具体的に考察することが可能になると考えた。

これまで、教育・保育における授業研究や実践研究は、数多くの研究が蓄積されてきている。しかし、授業や保育実践に基づく造形表現に関する研究は、各領域・各教科等における研究と比較すると、非常に数少ない状況にある。また、絵本や図鑑を活用した造形表現に関する研究は、ほとんど蓄積されていないのが現状である。そのため、絵本や図鑑、造形表現に関する研究の充実と蓄積を図ることは、教育・保育全体の質の向上に貢献することに繋がり、意義のあることだと考える。

2. 本研究の経緯と方法

本論は、拙稿「物語の絵本と子どもの育ち¹⁾」の継続研究である。前回は、主に保育内容・領

域言葉と小学校国語科における授業研究の成果に学びながら、物語の絵本を「文学的な文章」という視点から捉え、造形表現における基礎基本と各領域・各教科等との接続部分に関する考察を行った。

今回、本論では、「説明的な文章」という視点から、絵本を「知識の絵本」と「科学の絵本」という側面から捉えた。そして、先行する研究成果や、教育・保育実践の事例に基づきながら、総合的に展開する造形表現のあり方について考察した。

知識の絵本や科学の絵本、図鑑については、基本的なあり方や定義についても確認する。また、「説明的な文章」から総合的に展開する国語科教育の授業研究「めだか」「図鑑づくり」については、公刊されているテキストを基に確認する。

こうした研究成果等を手がかりにしながら、認定こども園・千葉敬愛短期大学附属幼稚園の保育実践「カタツムリの描画」に保育参加させていただいた。小学校と認定こども園という学校種の違いが存在するが、造形表現と各領域・各教科等との接続部分の考察を行う上で、総合的に指導する幼児教育・保育の視点や要点を明確化するために、小学校の各教科等における見方・考え方は、非常に理解しやすく、手がかりを与えてくれることから、このような研究の実施を試みた。教育・保育実践に有益で、汎用性の高い造形表現の充実と蓄積を図ることが目標である。

3. 知識の絵本・科学の絵本・図鑑

(1) 知識の絵本と科学の絵本

①知識の絵本

絵本学の研究成果の一つである『絵本の事典²⁾』によると、「知識絵本」は「知識の伝達を内容とした絵本」である。自然・社会科学系の絵本となる。扱うテーマによって、「科学絵本」「動物絵本」「たべもの絵本」「乗り物絵本」「認識絵

本・ものの絵本」「観察絵本」等に分類される。

「科学絵本」で扱われる題材には、「子どもたちにとって観察しやすいもの（目に触れやすい）」「子どもたちにとって観察しにくいもの（地面の下、海の中、宇宙、原子、分子など）」「実験や科学遊びの方法を解説したもの」等がある。表現技法として対象を写實的に細かく描いたり、もともと微少なものをクローズアップして見せたり、大きなものを俯瞰的に見せたり、なかなか見ることができないものの断面を見せたり、モデルや図式化で表現したり、写真を用いたりしているものもある。文章表現は、「いわゆる解説的な文章や、帰納法的、演繹的、それらが融合した仮説実験（検証）的な説明がなされている説明文的な文章」がある。一方で、「物語的な文章表現のもの」も存在する。

このように、絵本学研究では、科学の絵本は、知識の絵本の中の一つとして分類され、位置付けられている。

幼児教育・保育の研究者・無藤隆は、知識絵本を「読み書き・算数などの絵本」「科学絵本」という側面から捉えている³⁾。

無藤は、およそ次のように述べている。絵本は、物語や絵本そのものの世界から離れ、文脈の外に飛び出しても、意味を持つことがあり得る。その絵本の多様性の一つとして「言葉遊び絵本」があげられる。知識絵本には、例えば「あいうえおの絵本」のように、言葉遊びを中心に描き出しているものや、ほとんど算数のドリルに近いもの、中身を教えるタイプのもの、お話の中に溶け込ませているもの、等が存在する。

知識絵本は、大人が何度か読むうちに、「あ、なるほどね」と見つけるある種の機転や機知と言えるような面白さが存在する。昆虫図鑑のようなカタログや図鑑の類は、興味がある子どもや大人なら読むこともあるが、あまり読み聞かせには向いていない。そのため、知識絵本が意味を持つには、繰り返し読んで覚えることが必要になる。乳幼児に強制的に読んで、途中から聞いていないから意味がない。途中で飽きる

子が出てきて騒ぎたてることもある。子どもが集中するためには、それ自体に興味を持つだけでなく、1ページごとの面白さ、ページをめくっていく時の意外性を作らなければいけない。しかし、実際には、5回でも10回でも読むに値するような仕掛けを作るということは、非常に難しいことである。

また、もう一つのタイプの知識絵本に、「学習絵本」、「知育絵本」と称される絵本が存在する。「ドリル」や「ワーク」等の言葉も使用されているが、1ページごとのゲームや遊び等が中心になっている。親としてはお勉強させているという安心感が得られる。子どもにとっては、小さいうちはお勉強と思っていないので、練習と同時に楽しさが味わえる。こうした絵本には賛否両論があるが、こうしたニーズが一方にあるというのも事実である、と無藤は自身で認めている⁴⁾。

②科学の絵本

無藤は、学習絵本、知識絵本と同様に、「科学絵本」は、やはり知識を得るのだけれども、むしろ科学的なものの見方や考え方というものを身に付けたり、得たりしていくものだと言っている。

絵本と保育の研究者・瀧川光治は、「科学絵本」「知識絵本」の源流は、日本では三つの源流をたどることができると指摘し、次のように述べている⁵⁾。一つは「科学的な知識や考え方について解説したり、説明したりすることを主とし、文体が解説調で書かれたもの」である。二つめは「『乗物絵本』『動物絵本』『植物絵本』『食べ物絵本』など、ものを扱った絵本で絵柄が大きく、名称などが描かれている本」である。カタログや図鑑のような趣を持つ。三つめは「現在の福音館書店の『かがくのとも』シリーズに代表されるような、一冊1テーマで物語性があり、その中に科学的な見方や考え方を織り込んだ絵本」である。

瀧川によると、「科学絵本」という表記は1937

年(昭和12年)に東京社から創刊された『小學科學繪本』全12冊が最初のものとされており、その表記が一般化されていくのは1940年代になってからである。

前述の無藤は、科学絵本は、写真やイラストを組み合わせ、生き物の生涯等のストーリーを描き出していくことが基本となっている、と述べている。また、科学絵本には、図鑑らしき表現をしたものもある。植物等、様々な種類の紹介を、正確さとリアルな美しさの両方があるCG処理等をした写真やイラストで描いている。植物図鑑に近い表現である。植物画の美しさは、正確な美しさであり、膨大な手間をかけて描かれている。こうした絵本を大人は好むが、子どもにとってはあまり面白くない、と無藤は指摘する。無藤によると、そこで写真を組み合わせながら、ストーリー仕立てにして、透明シートやシールを貼る、等の仕掛けをする。要するに、ドラマティックな要素を絵本に取り入れることが、子供向けにする1つの手法となる。この種の科学絵本は、少し取っつきにくいところがあるが、ほとんどの園で大事に保存され、活用もされている。科学絵本には、図鑑性と美しさを併せ持つものや、楽しさと学習がかなり本質的に結び付いているもの等がある。無藤は、科学絵本は非常に可能性を持った分野だと述べている。

(2) 絵本と図鑑について

①ものの名前と図鑑絵本

無藤は、図鑑絵本のはじまりについて、大人が小さな子どもに教える時、最初にももの名前が来ることを指摘した発達心理学者・エレン・マークマンによる「語学習における制約説」を基に考察を行っている。赤ちゃん絵本の絵は、単純な絵であると同時にもの名前を表すものになっている⁶⁾。その上で絵本の場合は、ただ名前を教えるだけでなく、それを広げるものとなっている。こうしたことを、無藤は命名ゲームとして紹介している。1歳向けの絵本の絵は、文脈なく単独で、背景の描写もなく、個物とし

て出てくる。この種の命名ゲームは、語彙を広げるものとなる。テレビも含めて大量の絵本などのメディアに接することが子どもの物事を覚える世界を広げている。このあたりが命名ゲームとしての絵本という問題なのであり、1歳台の絵本の1つの典型で、将来的には図鑑になっていく。命名すること、名前を知ることということが、我々の知識・認識の基本になっている。

②図鑑と留意点

図鑑は何でも書いてあるけれど、別にだから役に立つわけではない、と無藤は指摘する⁷⁾。物語として先に進んでいくところを、もっとしっかり進ませれば物語となり、横に広がって網羅的にすべてを表していこうとすると図鑑となる。そのバランスの中で幼児期のお話絵本や、図鑑ふうの物語性を持った絵本は作られている。

図鑑とは、特殊な形と名称と簡単な説明がセットとして描かれている。基本的には全種類が出ており、網羅的、カタログ的である。こうした図鑑への関心というものは、将来理科や社会科の勉強につながるような気もするが、だいぶ違う感じもする、と無藤は述べている。いろいろな形と名前を見ていくことによって、それを網羅的に進めていく作業となる。親は、子どもがそういうものに興味を持つと、将来科学者になるかしら、と思うかもしれない。科学者になる子もいるだろうが、多分そう直結している訳ではない。幼児向けの絵本は、イラストや写真と共に、いろいろな解説が、科学読み物の組み合わせとなって入っている。幼児向けの図鑑は、幼児の終わりから小学校半ばぐらいを想定して作ってある。そのぐらいまでは、基本的には世界の様子を知ること、すべてが網羅的に同じ種類のものがたくさんあって、少しずつ違うが、それぞれに名前がある、それぞれ特徴があるということであるはずなのである。図鑑は個物として扱うので、背景としての舞台や場所は示さない。しかし、背景としての場所や舞台を示さないと、生態学的な関係は分から

ない。

無藤が指摘するように、図鑑や科学絵本を活用することによって、過度の期待や成果を求めることは控えた方が賢明なのだろう。

本来、科学的に考え、理解するということは、こうした生態学的に複雑な関係を理解し、把握することが重要なのだと考えられる。幼児期や保育における図鑑の活用は、こうした興味や関心が、子どもたちの中に芽生える一つのきっかけになるのものとして捉えた方が良いのかもしれない。

4. 読むことの学習 — 説明的な文章と文学的な文章 —

(1) 基本的な概要

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編⁸⁾』では、国語科の内容は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」から構成されている。「読むこと」は、「思考力、判断力、表現力」の中に、「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」と共に「C 読むこと」として、3領域を構成している。

「読むこと」の学習過程は、「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」から構成される。このうち、「構造と内容の把握」「精査・解釈」は、さらに「説明的な文章」と「文学的な文章」の二つに分けられる。

「構造と内容の把握（説明的な文章）」を系統的に確認すると、表1のようなになる。

表1 「構造と内容の把握（説明的な文章）」

第1・2学年	内容の大体を把握する
第3・4学年	考えとそれを支える理由や事例との関係などを把握する
第5・6学年	文章全体の構成を捉えて要旨を把握する

「精査・解釈」とは、「文章の内容や形式に着目して読み、目的に応じて必要な情報を見付け

ることや、書かれていること、あるいは書かれていないことについて、具体的に想像することなど」のことである。「精査・解釈（説明的な文章）」を系統的に確認すると、表 2 の通りとなる。

表 2 「精査・解釈（説明的な文章）」

第 1・2 学年	文章の中の重要な語や文を見付ける
第 3・4 学年	中心となる語や文を見付ける
第 5・6 学年	必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりする

同様に、文学的な文章の系統性についても確認すると、それぞれ表 3、表 4 の通りとなる。

表 3 「構造と内容の把握（文学的な文章）」

第 1・2 学年	場面の様子や登場人物の行動などを捉える
第 3・4 学年	登場人物の行動や気持ちなどを捉える
第 5・6 学年	登場人物の相互関係や信条などを捉える

表 4 「精査・解釈（文学的な文章）」

第 1・2 学年	登場人物の行動を具体的に想像する
第 3・4 学年	登場人物の気持ちの変化や性格、情景を具体的に想像する
第 5・6 学年	人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする

「考えの形成」と「共有」の内容は、「説明的な文章」と「文学的な文章」には分けられていない。「考えの共有」の系統性は表 5、「共有」の系統性は表 6 の通りである。

また、「読むこと」の言語活動例の中には、「読み聞かせを聞いたり物語などを読んだりして、内容や感想などを伝え合う活動（第 1・2 学年）」や「図鑑や科学的なことについて書いた本などを読み、分かったことなどを説明する活動（第 3・4 学年）」等があげられている。

表 5 「考えの形成」

第 1・2 学年	感想をもつこと
第 3・4 学年	感想や考えをもつこと
第 5・6 学年	自分の考えをまとめること

表 6 「共有」

第 1・2 学年	感じたことや分かったことを共有すること
第 3・4 学年	一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと
第 5・6 学年	自分の考えを広げること

(2) 青木伸生の授業研究

① 「読むこと」の学習

国語科教育の青木伸生は、筑波大学附属小学校をはじめとする授業研究をもとに、「フレームリーディング」という視点から、「読むこと」の学習過程について、およそ次のように考察している⁹⁾。

「フレームリーディング」とは、「自分のもっているフレーム（目のつけどころ）を生かしつつ、そのフレームを更新したり、新たなフレームを獲得したりしながら文章のつながりをとらえる読みの手法¹⁰⁾」である。子どもが、自分の力で文章を読み解くことができるように、フレーム（目のつけどころ）を持たせることを目的とする。

「フレームリーディング」は、認知科学の知見（スキーマ理論）に拠っている。人は、文章を理解する上で、自分のもっている様々なフレームを駆使している。そのフレームを国語の授業によって身につけさせ、文章を読むときに、自分の身につけたフレームを子どもが選択し、駆使して読む。その子どもの意識が、文章を読む上での学びの出発点となる。読むことにおいて身につけたフレームは、書くことや話すこと、思考のプロセスにも繋がり、応用も可能だろう、と青木は述べている。「フレームリーディング」

の学習過程は、学習指導要領の「読むこと」の学習過程とほぼ同じ流れとなっている。

青木の授業研究は、ほぼ全ての教科書教材を中心に、詳細に考察・データ化されている。授業実践に基づき、「グループ学習」「個別最適な学び」「教材研究のポイント」「発問」「単元構想」「本時のねらい」「指導のポイント」「板書のポイント」「アウトプットの活動」「ふり返り」「ノート指導」の他、「教材・教具活用」「音読指導」「話し合い指導」「評価」等¹¹⁾が、教材ごとに、具体的にまとめられている。

②説明的な文章と文学的な文章の授業の視点

青木は学びの初期の段階では、子どもに目のつけどころを持たせるための発問が必要だと指摘する¹²⁾。発問は、学習材の特性や内容に応じて臨機応変に工夫される。

○構造と内容の把握

「構造と内容の把握」における発問は、「数える」ための発問が中心となる。数える活動を通して、文章全体を俯瞰する。

「説明文（説明的な文章）」

- ・段落はいくつ？
- ・事例はいくつ（または何種類）紹介されている？

「物語（文学的な文章）」

- ・登場人物は何人ですか？
- ・場面はいくつ？
- ・出来事はいくつ？
- ・この人物の会話文はいくつある？
- ・キーワードは何回出てきた？

○精査・解釈

「精査・解釈」の発問は、基本は「選ぶ」ことを促す発問となる。子どもが選ぶためには、他と比較して、共通点や相違点を明確にすることも必要である。

「説明文（説明的な文章）」

- ・一番大事な段落はどれ？
- ・筆者の主張に対して一番重要な事例はどれ？

「物語（文学的な文章）」

- ・中心人物が一番大きく変わったのはどこ？
- ・一番大事な会話文はどれ？

○「考えの形成」

全体を見わたし直して、子ども自身が、自分の考えをまとめるための発問である。青木は「考えの形成」においても「物語」と「説明文」に分けて、具体的に記述している。

「説明文（説明的な文章）」

- ・あなたの納得度は何パーセント？
- ・あなたの賛成度は何パーセント？
- ・あなたならどんな資料を使う？

「物語（文学的な文章）」

- ・なぜこの題名なのかな？
- ・あなたなら、どうする？

青木が例示するこうした発問は、教師が指導する際の視点と重なっている。また、授業の単元構想を考える際の構成要素にもなっている。

5. 絵本と図鑑と説明的な文章の国語授業研究

(1) 青木伸生の国語授業「めだか」

青木は、説明文の国語教材「めだか」（教育出版3年）の授業研究を行っている¹³⁾。国語の説明文教材「めだか」は、動物学者・杉浦宏が教科書教材のために書き下ろした説明文である。童謡「めだかの学校」（茶木滋／作詞、中田喜直／作曲）の歌詞から始まっているところに特徴がある。青木は、この授業の単元構想において、「めだかの秘密を読み取って、『めだかのひみつ絵本』をつくろう」という中心課題を設定している。「絵本をつくる」という箇所は、青木が構想し、工夫した箇所となる。

教科書の説明文は形式段落（ひとまとまりの内容を示した文章）に分けて書かれているので、青木は、説明文を読み解くために、形式段落ごとに段落番号を付けて、その数を数えるというフレーム（目のつけどころ）を、発問によって子どもたちに与えている。

この授業で「めだかのひみつの絵本」を作るとは、「めだか」に関する絵本を製作することではなく、この説明文を読み取り、形式段落を基にして、「いくつの絵本を作ることができるか？」という意味段落のまとまりを見付ける学習を行うことが目的とされている。この点が、国語科教育の授業のねらいであり、見方・考え方ということになるのだろう。青木は、文章の全体像を捉え、その上で意味のまとまりで分けていく学習を、「絵本づくり」という言語活動単位として実践している。

青木の授業では、生徒がそれぞれに見つけた意味段落のまとまりの数に応じてグループを形成し、それぞれの考える絵本を、その数に応じて製作する、という形をとっている。グループ内で内容を分担すると、それほど時間をかけなくても絵本を仕上げることができる、と青木は述べている。造形・図画工作では、色や形、イメージ、製作等に重点を置くことが多いと考えられるが、こうした国語科教育等の視点も考慮に入れた上で、改めて授業について考えてみることは、意味のあることだと思われる。また、本教材「めだか」は、童謡「めだか」の歌詞も盛り込まれ、動物学者の杉浦によって、「めだかの紹介」「めだかの敵」「めだかの身の守り方」「めだかの自然環境における適応」等について記載されている。保育内容の領域表現や環境、言葉、総合的な指導等の点からも、非常に興味深い教材だと考えられる。

(2) 青山由紀の国語授業「図鑑づくり」

国語科教育の青山由紀は、説明文の国語教材「くちばし」「どうぶつの赤ちゃん」「じどう車くらべ」(光村図書1年)の授業研究を行っている¹⁴⁾。青山によると、説明文における「読み方」とは、説明文を読むときに身につけさせたい「読みのスキル」を指す。例えば『「はじめ・中・終わり」の三部構成で文章を捉える』『小見出しをつける』といったように、他の説明文を読むときにも活用できる方法のことである。一方、説明

文における「思考」は、汎用的な能力であり、国語の授業では主に次の「思考」が見られる¹⁵⁾。

- ・【比較】の思考
- ・【分類・整理】の思考
- ・【順序】の思考
- ・【因果関係】の思考(原因と結果、理由と結論)
- ・【推測・類推・仮定・置き換え】の思考
- ・【抽象・一般⇔具体・例示】の思考

これらの「思考」を意識して授業を構想することが必要となる。

①「くちばし」

青山は、1年生で身につけたい「読み方」は、「問い」に対する「答え」を見つけることである、と述べている¹⁶⁾。1年生の説明文の第1教材「くちばし」は、「問い」に対する「答え」を見つけることで、クイズを解くように内容を読み取ることができる仕組みになっている。素材「くちばし」へ興味を持たせた後、説明文の内容を捉え、全体の構成を掴む。そして、青山の授業では、「くちばしクイズブック(くちばし図鑑)」の製作を行う。その目的は、生徒が資料¹⁷⁾から情報を読み取り、教材の説明の仕方にも則った説明文を書くことにある。説明文をクイズ形式で書く。クイズはそのための手だてなのである。

授業は「くちばしの形状」と「餌とそのとり方」等の因果関係に着目し、【因果関係】の思考を育むことに重点が置かれている。その他、例えば、「事柄の並び」や「説明の順序」等に注目する【順序】の思考、最初の挿絵から形や様子を比べる【比較】の思考、等が育まれることとなる。こうした見方・考え方は、国語科教育に留まらず、造形や図画工作等でも有益な視点だと考えられる。

②「じどう車くらべ」

「じどう車くらべ」は、説明文の第1教材「くちばし」で学んだ「問い」に対する「答え」を

見つける「読み方」を活用する教材である。事例同士を比べる【比較】の思考と、「しごと」と「つくり」という【因果関係】の思考を働かせる教材だと、青山は指摘している¹⁸⁾。

「じどう車くらべ」の授業でも、青山は、「図鑑づくり」を実施しているが、本文中の「しごと」と「つくり」の関係を理解できない子どもが必ず出てしまう、と述べている¹⁹⁾。この説明文の教材では、「しごと」のための「つくり」であることを捉えることが求められている。しかし、子どもは【因果関係】の理解が曖昧であるため、「つくり」を「見た目の様子であれば何でもよい」と捉えてしまい、つまづいてしまうのである。このことは、本文を具体的に読まない、とわかりにくいことかもしれない。しかし、実際に本文に目を通したとしても、複雑でわかりにくい箇所であることは確かなようである。特に1年生にとっては、本文中の、どの「つくり」を優先して説明したらよいか、難しい箇所なのだろう。青山はそのための手だてとして、【比較】と【因果関係】の思考を働かせることと、「そのために」という、つなぎ言葉を理解の助けとして活用すること等によって、子どもの理解を促すことができると述べている。

「じどう車くらべ」の授業では、文と文を比較し、因果関係を捉え、「説明の仕方」を活用して表現し、各自動車の説明（事例）の順序性を捉えることに重点が置かれている。これらの学習を整理・理解する手だてとして、「図鑑づくり」は活用されている。

その後、さらに自動車の映像資料から、必要な情報を選び、文章にまとめる、いう説明文づくりの学習活動も、青山の授業では展開されている。

③ 「どうぶつの赤ちゃん」

この教材の特長は、答えである二つの事例「ライオンの赤ちゃん」と「しまうまの赤ちゃん」が対比的に述べられている点にある。青山の授業では、この二つの事例を【比較】することに

主眼が置かれている²⁰⁾。【比較】の思考とは、「共通点と相違点を判別することである」「同じ観点で比べてみたときに、『違い』があるからこそ、説明する意味がある。」と青山は指摘する²¹⁾。本授業においても、青山は「どうぶつの赤ちゃんクイズ」や「図鑑づくり」を取り入れている。

また、上学年での「読み」のねらいに迫らせるような発展的な内容として、「筆者を意識させる」学習や、普段の大半の授業で行われている「詳細読み」ではなく、必要な情報を素早く見つける「情報読み」の学習活動、等も実施している。

こうした国語科の授業における「ねらい」や「観点」も、造形・図画工作の授業や活動を考える際に、改めて考慮してみる価値はあるのだろう。

6. 絵本と図鑑と造形表現の保育実践研究

(1) 認定こども園・千葉敬愛短期大学附属幼稚園

これまで本論で確認してきた知識の絵本や科学の絵本、図鑑、国語科教育における説明文の授業等を念頭に置きながら、千葉敬愛短期大学附属幼稚園で保育実践研究を実施させていただいた。幼児教育・保育における造形表現の総合的な指導について、実践に基づく形で考察するためである。

千葉敬愛短期大学附属幼稚園は、1973年に開園し、2019年に認定こども園に移行した園である。心と心が通い合う、温かい保育「のびのび保育」を大切に、実践を積み重ねている。現在は、「1 ことばの泉プロジェクト」「2 科学的環境づくりプロジェクト」「3 幼稚園まるごとミュージアムプロジェクト」等を主に展開している²²⁾。

園内には、「かがくのかだん（考える花壇）」という花壇が設けられている²³⁾。理科教育の研究者でもある杉山清志園長が中心となり、身近

に生息する動植物等の自然の生態系等を考慮して造った花壇である。それぞれの季節に応じて、蝶をはじめとする昆虫やその幼虫等が、コマツナや柑橘系の植物等が植えてある花壇の周辺に好んで集まってくる。子どもたちが自然に興味・関心を持ち、人と関わりながら知的好奇心や感性を育む環境となるように工夫されている。また、一年の四季を通じて楽しむことができる植物等も、園内には植えられている。日常生活の中で、園児が実感として感じ取り、探究し、楽しく体験することができる「かがくのかだん(考える花壇)」となっている²⁴⁾。

本論では、こうした環境の整った園で、知識の絵本・科学の絵本、図鑑から展開する造形表現の総合的な指導について、保育実践研究を実施した。

(2) 上田和美の保育実践「カタツムリの描画」 (5歳児・年長クラス)

今回は、千葉敬愛短期大学附属幼稚園に依頼し、普段の日常の保育に1日参加させていただいた。絵本を手がかりにした造形表現の保育実践研究が目的なので、①知識の絵本・科学の絵本の読み聞かせを行うこと、②図鑑を活用すること、③そこから造形表現に展開すること、の3つの内容については研究上の課題と条件として、こちらから提案し、お願いした。千葉敬愛短期大学附属幼稚園では、保育教諭・上田和美が、この実践研究を快く承諾してくださり、上田が担任をする5歳児・年長クラスに保育参加させていただくこととなった。

この保育実践研究を実施することで、園の子どもたちや先生方にご負担やご迷惑、ご無理等がかからないように、可能な限り配慮をして本研究は実施した²⁵⁾。

本論は、普段の日常生活における保育実践に基づいた形で考察することを目的としている。そのため、特別な準備をすることなく、極力、普段の上田の保育の中に、筆者が参加させていただく形をとった。そのため、前述の研究上の

3つの条件については、担当の上田が実施しやすい形で普段の保育の中に取り込んでいただき、子ども達のこれまでの姿や経緯を考え、配慮した上で、無理のない形で実施していただいた。上田は、32年目のベテランの保育教諭であり、これまで千葉敬愛短期大学附属幼稚園を支えてきた実績のある保育教諭である。

①園の1日

上田は、5歳児クラス・ほし組の子どもたちのこれまでの様子から、カタツムリとの関りから造形表現に展開する保育を構想した。

午前9時に子どもたちが登園し、着替えを済ませた後、室内で遊び始める。室内には、既にダンボールで作った家が置いてある。毎日、この段ボールの家で遊んでいるということであった。保育参加させていただいた当日も、子どもたちは、これまでの継続として、この段ボールの家の中や周辺で、レストランごっこをしたり、空き箱製作を楽しんだりしていた。その他、折り紙を楽しむ子、コマ回しに夢中になる子等、それぞれの興味や関心に基づいて、楽しそうに遊んでいる。

午前10時頃、子ども達は外に出て園庭で遊び始める。縄跳びやかけっこ、砂場遊び、一輪車をはじめとする乗り物等で遊ぶ。当日は、少し肌寒い天候であったが、子ども達は元気よく遊んでいた。上田は、研究に関わらず、ほし組では毎日行っているという、カタツムリの世話を子どもたちと始める。カタツムリに水や餌を与える等の世話をし、様子を観察することが目的である。その様子を筆者も一緒に見学させていただいた。上田によると、カタツムリに強い関心を示す子が数名おり、その子達とクラスの子も達と一緒に、既に図鑑でカタツムリについて調べる活動は行っている、ということだった。

②「カタツムリの描画」

午前11時頃、予定より少し早く園舎の中に入り、保育室に戻る。少し肌寒かったことにもよ

る。手洗い、うがい等の感染症対策も、しっかりと行われた。保育室では、上田が段ボールの家や机、椅子等を配置し直し、描画活動が実施できる態勢を整えていた。子どもたちは、4人1組となって、所定の席に着席する。着席後、上田はまず、絵本の読み聞かせを行った(図1)。絵本作品は、夏目義一／作、三枝博幸／監修の『かたつむり』である²⁶⁾。上田によると、「カタツムリについて、非常に詳しく、わかりやすく紹介されているので、この絵本を活用することにした」ということだった。

この絵本作品は、カタツムリについて、非常に詳しく正確な情報を基にして作られている。絵も写実的で、非常に美しい。内容は、カタツムリの視点から、物語を読むような語り口で書かれている。カタツムリの形状や好む餌、体のつくりや機能、成長や生育の様子等が、絵と共にわかりやすく紹介されている。ページによっては、絵を見ればわかるように表現(説明)されており、文章による表現(説明)が省略されている場面もある。「自分でよむなら4才～小学校初級むき」と絵本には記載されている。福音館書店の「かがくのとも」シリーズの1冊として刊行された作品である。そのため、この絵本作品は、「科学の絵本」ということになる。しかし、主に幼児を対象にして作られた絵本であるため、内容は、説明的な文章で扱われる内容が物語の中に溶け込んでおり、親しみやすく、読みやすい、文学的な文章のような表現で書かれている。

上田は、この絵本を読み聞かせた後、先ほどの世話をしていたカタツムリを数匹ずつ容器に入れ、子ども達の座る各テーブルのグループごとに置いてまわった。子どもたちは、目の前のカタツムリを改めて観察し、嬉しそうに声をあげた。これまで慣れ親しんで、世話をしてきたため、喜びの感情の方が大きかったようである。指で触ってみたり、声をかけたり、隣の友達同士と話をしたりして、楽しそうに関わり始めた。上田はそこで、「画用紙にマーカー(サ



図1 絵本の読み聞かせ



図2 カタツムリの描画①



図3 カタツムリの描画②

インペン)でカタツムリを描きましょう。」「描いたカタツムリは、(画用紙を)ハサミで切って、この模造紙に貼ってあげましょう。」と声をかけた。模造紙は2枚あり、子ども達が絵具で

表現した絵が既に描かれていた。1枚は、主に地面や草むら等の園庭の様子が描かれたもので、もう1枚は、主に食べ物等が描かれたものであった。画用紙は、ハガキ大の大きさに揃えて、やはり事前に準備されていた。描画材料にマーカーを使用したのは、「乾燥が早く、すぐに模造紙に貼ることができるから」という理由による。

子どもたちは、思い思いに絵を描き、ハサミで切り抜いて、模造紙の中の自分の好きな場所にのり付けして、貼り付けていった。カタツムリに対する親しみや愛着が強く感じられ、描画が済んだ子ども達同士でも、カタツムリの容器を皆で覗き込み、楽しそうに声をかけ合う姿が見られた。(図2～図6)

その後、子どもたちは後片付けをして、先生と共に昼食の準備に移っていった。

③保育実践のふり返り

保育に参加させていただいた当日の終わりに、上田からその日の保育のねらいとふり返りについて、お話を伺った。上田によると、きっかけは、春の時点で、ほし組の子ども数人がカタツムリを見つけ、捕まえてきたことに拠るのだそうである。最初は取りっぱなしで済んでいた。そのうちに「飼いたい」と子どもの方から上田に言ってきた。当初は、「虫嫌い」「怖い」「気持ち悪い」という子どもが、ほし組には他に存在した。しかし、飼いたい子どもたちは、もっとたくさんのカタツムリを捕まえるために、図鑑を持ってきて、カタツムリの居場所を調べ始めた。そのうち、園庭の特定の数か所にたくさんのカタツムリが生息していることがわかってきた。結局、子ども達はカタツムリをたくさん捕まえて、ほし組で世話をし始めた。すると、カタツムリが卵を産み始めた。偶然にも、ほし組の子どもたちは、カタツムリが産卵する瞬間を目撃することもできた。夏休みの長期の休業期間中は、上田が自宅でカタツムリの世話を続けた。寒くなってきて、カタツムリの動きが鈍くなってきた、ということだった。



図4 カタツムリの描画③



図5 カタツムリの描画・模造紙①



図6 カタツムリの描画・模造紙②

今回、上田は、描画活動を行う際に、子どもたちがカタツムリをイメージしやすいように話すことを心掛けたそうである。上田によれば、子どもは年長になると、正しいことを描こうと

する傾向が強くなる。絵を描くことが苦手な子や、関心をあまり示さない子もいるが、いずれにしても、子どもは、最初は真似から入っていく。

作る活動に強い興味を示す子が、ほし組には多い。「自分たちでやりたい」「自分のイメージに近いもの」「こだわりが強い」等の傾向も、よく見られる姿である。そうした中での評価、特に良い評価が、子ども達の自信になる。子ども達の達成感を大切にしたい。

およそ、このように上田は考え、保育を展開した。「子ども達の『今やりたい』という気持ちを受け止め、そのタイミングを逃さないように付き合うことを大切にしている」という上田の言葉が印象に残った。

7. 総合的な指導と造形表現 —絵本と図鑑を手がかりにして—

本論では、絵本や図鑑を手がかりにして、造形表現の総合的な指導について考察を行ってきた。国語科教育の「読むこと」の学習過程（「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」）は、絵本や図鑑、造形表現を考える際にも、有効な手がかりを与えてくれるものだと考えられる。また、知識の絵本、科学の絵本、図鑑のそれぞれの特質や傾向等も、絵本学や無藤の考察を手がかりにして確認することができた。知識の絵本や科学の絵本も、例えば、説明的な文章や文学的な文章という視点から捉えてみると、比較的わかりやすく、捉えやすくなるようにも思われた。

今回の保育実践研究では、子ども達は、カタツムリの居場所を探し、特定するために図鑑を活用している。子どもの興味や関心の所在が感じられる事例だったと思われる。今回は、こうした子ども達とカタツムリとの出会いや関わりから、図鑑の活用、絵本の読み聞かせ、造形表現へと展開する保育のあり方について検証した。幼児の場合、自分たちが考え、体験したことを、

描画や造形活動を通して表現することは、体験や実感、思考や理解を定着させるという効果もあり、非常に意義のあることだと考える。

子どもを対象にした幼児教育・保育について、実際の子どもの姿や実践に基づいて考えると、造形表現や美術という視点からのみの考察では、どうしても無理が生じてくると思われる。そこには、既存の知識や習慣等をこれから習得する子どもの姿が存在し、それを支える保育者と、その子どもの幸せと健やかな育ちを願う保護者が存在する。自分自身の子どもに特定の偏った教育を受けさせたいと考える保護者は、当然ながら、まず存在しないだろう。バランスよく、総合的に物事を身に付け、どのような時でも、周囲と協力しながら、幸せに、しっかりと生きていける力を獲得して欲しいと願うのが、親の自然なあり方なのだろう、と考えられる。

こうした保護者の視点や評価に対する理解や対応については、意見が分かれることもあり、難しい問題も孕んでいる。例えば、造形活動やその作品に接した際に、子ども自身は「楽しかった」と満足していても、保護者の視線は、「きれい」「美しい」「飾ることができる」「友人や仲間ができる」「人間的な強さが培われる」「学力が向上する」「進路に有益である」等の点に注がれてしまうこともあるのかもしれない。造形表現で大切に考えられている物事、幼児教育・保育や園で大切に考えられている物事、等は当然存在すると思われる。しかし、実際問題として現実的に考えると、こうした保護者の視線や評価は、園や先生方に向けられるだけでなく、その保護者の子どもに対しても、最も直接的に大きな影響を与えることになるのだろう。こうした保護者の想いを抜きにして、保育や造形表現を考えることは、現実的には難しいことなのだと考えられる。逆に、保護者の立場から考えれば、それだけ切実に我が子の成長と幸せを願っている、ということなのだろう。こうした保護者の想いや願いに配慮する、あるいは応える造形表現のあり方について、造形表現の良さや本質を

崩さない形で検証することも、教育・研究上の問題として必要な作業なのだと考えられる。造形表現の総合的な指導について考察することは、こうした問題にも対応する手がかりや可能性があり、意味のあることだと考えている。

8. おわりに

本研究は、子どもの育ちや、日常の保育実践に有益で汎用性のある造形表現について考察し、その充実と蓄積を図ることを目的としている。知識の絵本や科学の絵本は、説明的な文書との親和性が高いと考えられるが、幼児向けの絵本として作品化する場合には、物語にその内容を溶けさせて、製作されていることが、本論では確認できた。子どもが親しみやすく、愛着の湧きやすい絵本作品となっている。こうした知識や科学に関する内容は、今後ますます求められるテーマだと考えられる。

小学校の国語科教育の「読むこと」の学習では、「説明的な文章」を重視する傾向も存在している。事実や情報を正確に読み取り、理解し、他者に伝え、説明し、共有することが、社会的にも重視され、求められているのだろう。

知識の絵本や科学の絵本、図鑑の活用から造形表現に展開する方法や実践については、今後も継続して研究していきたいと考えている。こうした研究の蓄積が、幼児教育や保育全体の質の向上に貢献し、充実に繋がるのだと考える。

註

- 1) 拙稿「物語の絵本と子どもの育ち ―領域言葉・国語と領域表現（造形）・図画工作の視点から―」『千葉敬愛短期大学紀要』第43号、2021年、p.29～p.45、所収
- 2) 中川素子、吉田新一、石井光恵、佐藤博一／編集『絵本の事典』朝倉書店、2011、p.315、所収。
- 3) 無藤隆、野口隆子、木村美幸『絵本の魅力

- その編集・実践・研究』フレーベル館、2017
- 4) 前掲書、p.244
 - 5) 瀧川光治「日本科学絵本の歴史」『別冊太陽 日本のこころ 286 科学絵本の世界 100 学びをもっと楽しくする』平凡社、2021、p.152～p.156、所収。
 - 6) 無藤隆、野口隆子、木村美幸『絵本の魅力 その編集・実践・研究』前掲書、p.66
 - 7) 前掲書、p.170～p.171
 - 8) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版、2018
 - 9) 青木伸生、「ことば」の教育研究会『個別最適な学びに生きる フレームリーディングの国語授業』東洋館出版社、2021
青木伸生『青木伸生の国語授業 3ステップで深い学びを実現！ 思考と表現の枠組みをつくるフレームリーディング』明治図書出版、2017
 - 10) 青木伸生『フレームリーディングの国語授業』前掲書、p.9～p.10
 - 11) 二瓶弘行、青木伸生／編著、国語“夢”塾／著『小学校国語 説明文の授業技術大全』明治図書出版、2019
 - 12) 青木伸生、「ことば」の教育研究会『個別最適な学びに生きる フレームリーディングの国語授業』前掲書、p.9～p.10
 - 13) 青木伸生「めだか」二瓶弘行、青木伸生／編著、国語“夢”塾／著『小学校国語 説明文の発問大全』明治図書出版、2021、p.67～p.92、所収。
青木伸生「めだか」『フレームリーディングで説明文の授業づくり』明治図書出版、2017、p.70～p.77
 - 14) 青山由紀『青山由紀の授業「くちばし」「じどう車くらべ」「どうぶつの赤ちゃん」全時間・全板書』東洋館出版、2018
 - 15) 前掲書、p.22
 - 16) 前掲書、p.22
 - 17) 資料は、青山が授業のために作ったオリジナル資料が使用された。その他、光村図書

より、説明文の授業に活用できる「図鑑づくり」のための資料用書籍も刊行されている。青山が著者の一人でもある。この書籍のシリーズには、説明文教材「うみのかくれんぼ」(1年)も含まれている。

高木まさき／監修、青山由紀、松永立志／編集、今泉忠明／協力『光村の国語 やってみよう！楽しいずかんづくり①「くちばし」ずかんをつくろう』光村図書、2020。同・『②「うみのかくれんぼ」ずかんをつくろう』、同・『③「じどう車くらべ」ずかんをつくろう』、同・『④「どうぶつの赤ちゃん」ずかんをつくろう』。全4巻。

- 18) 青山由紀『青山由紀の授業「くちばし」「じどう車くらべ」「どうぶつの赤ちゃん」全時間・全板書』前掲書、p.23
- 19) 前掲書、p.23～p.24
- 20) 前掲書、p.26～p.27
- 21) 前掲書、p.26～p.27
- 22) 認定こども園・千葉敬愛短期大学附属幼稚園 HP、<https://kg.chibakeiai.ac.jp/>
- 23) 千葉敬愛短期大学附属幼稚園「『科学する心の連鎖』—様々な小さな生命から学ぶ生命の大きさ—」2018年度ソニー幼児教育支援プログラム、p.2～p.4
- 24) 千葉敬愛短期大学附属幼稚園「『わかる』って楽しいね —小さな失敗を乗り越え思考を深める“ことばの泉づくり”を通して—」2019年度ソニー幼児教育支援プログラム
- 25) 本研究は、「千葉敬愛短期大学研究倫理規定」に基づき、必要な手続きを行った上で実施した。
- 26) 夏目義一／作、三枝博幸／監修『かたつむり』福音館書店、1997

げる。保育参加を快くお許しくださった杉山清志 園長、和田由美 副園長、上田和美 保育教諭、本研究を支えてくださった鈴木健一 教授に、心より御礼申し上げます。

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご協力くださった認定こども園・千葉敬愛短期大学附属幼稚園の皆様、千葉敬愛短期大学の皆様に感謝申し上げます。